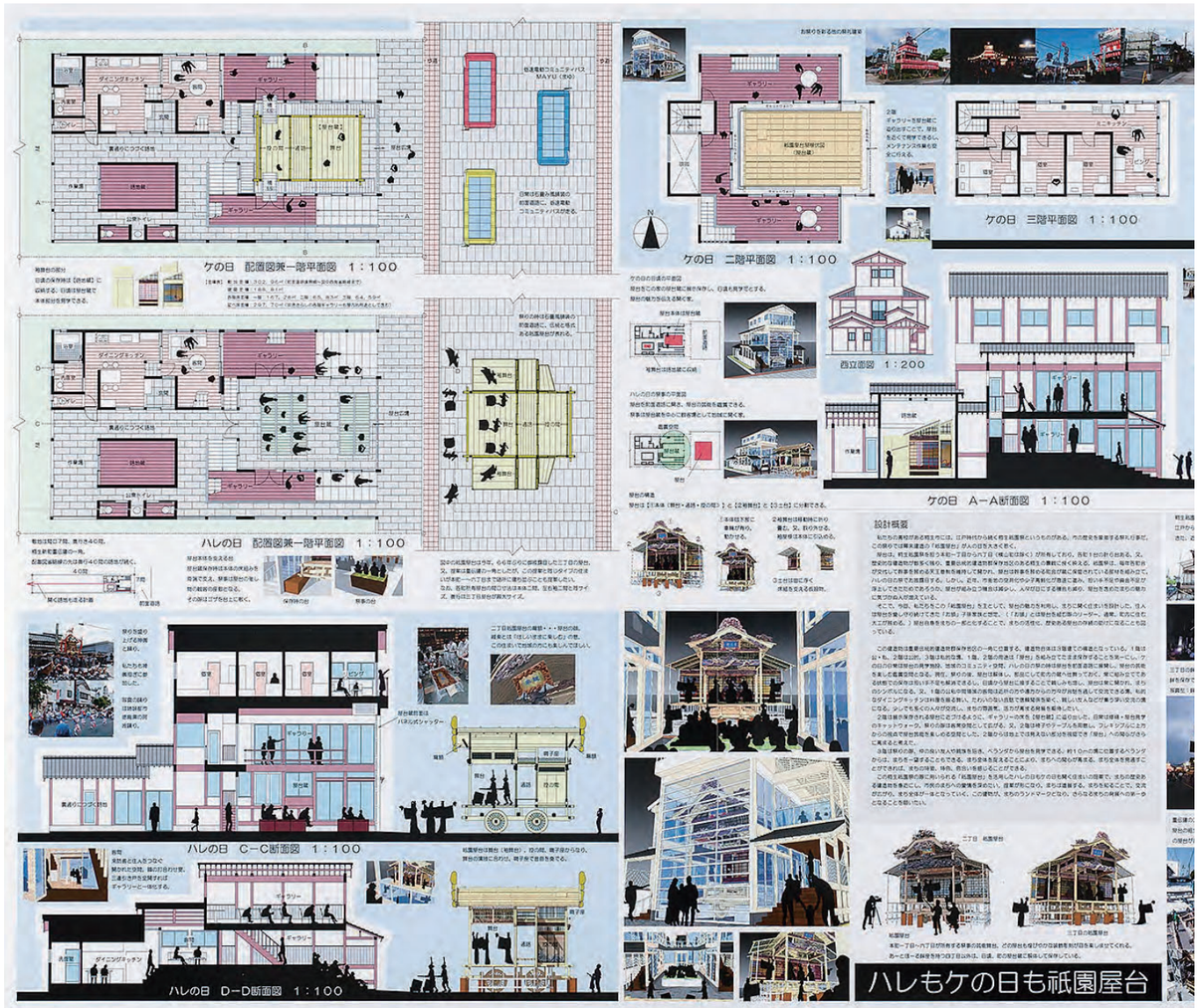
優勝

ハレもケの日も祇園屋台

群馬県 | 群馬県立桐生工業高等学校　選手…3年生4名

表彰式にて



全国でも有名な、桐生新町重要伝統的建造物群保存地区の本町1〜6丁目の大通りに面した敷地に、常設の屋台蔵を併設した地域に開く住まいを、各自治会に1カ所計6カ所建設しようという提案である。

桐生祇園祭は、桐生市の歴史と文化を象徴する重要な行事として江戸時代から地域住民や観光客に親しまれてきた。その伝統と魅力は、今もなお大切に守り続けられている。屋台は、舞台の下に車輪が付いた構造で、ふすま絵や扁額（へんがく）を備え、祇園祭を担う本町1〜6丁目の自治会が各1台所有している。この祇園祭ではかつて、国内最大級の屋台や鉾（ほこ）（山車）が町中に繰り出し、屋台では歌舞伎や狂言といった演目が披露されていた。ところが近年は、市街地の空洞化や少子高齢化が急速に進み、担い 手不足や資金不足もあり、普段解体して保存してある屋台を組み立てることは少なくなり、人々が目にする機会も減ってしまった。このような現象は、地方の文化や伝統の継承において日本中に多くみられる傾向である。

そのような背景を踏まえ、この作品では現在有効活用されていない屋台を祇園祭の時だけでなく、日常的に住民や観光客の関心を集め、交流の場や活気を取り戻すことを提案した。祇園祭開催時は常設の屋台蔵に納めてある屋台を全面道路側へ引き出し、その分屋台が出たあとの空間を観客用座席に使用するというのも面白い。建築甲子園で何度も上位に勝ち進んでくる常連校だけあって、地域コミュニティのきっかけづくりとしての発想やプレゼン能力には卓越したものがあり、審査員一同が優勝推薦する作品となった。

ただ、複雑なスキップフロアの3階建ては構造的に無理がないか気になるところもある。またこの住人は祇園屋台を脈々と守り続けてきた「お頭家族」という設定であるが、職住一体の戸建ての家「まちに住 む・地域に開く住まい」という課題に対し、ここに住む「お頭家族」のかかわり方が何も言及されていない。この建物用途と形態でどうやって職住を一体できるのか、屋台蔵部分の所有権や維持管理はどうするかの提案も欲しいところである。

また、たとえば、「若い世代や観光客が興味を持ちやすいアート展示や音楽イベントを組み合わせる」「地元や祭りに関心のある全国の人々からクラウドファンディングなどで資金を募る仕組みを利用する」「高齢者から若者へ祭りに関する知識や技術を伝え、世代間交流を通してのコミュニティの再構築の仕組みをつくる」など、若者の発想として伝統の継承と地域の繋がりが深まるような提案も今後は非期待したい。この度の優勝大変おめでとうございます。（田中）

受賞のことば

この度は栄えある賞に選んでいただき誠にありがとうございます。これまで御支援してくださった地域の方々、そして、長年、先輩から僕たちまで御指導してくださっている上石先生には感謝の気持ちで一杯です。今回の優勝は携わってくださったすべての皆様のお力の賜物だと思っております。本当に感謝しています。

今回、僕たちが提案した作品は桐生市に残る祭礼建築「祇園屋台」を活用したものです。この祇園屋台は市の歴史を象徴する桐生祇園祭で用いられ、祭りでは多くの人々の目を惹きます。しかし、担い手不足などの影響により、屋台が組み立てられる回数が減り、人々が目にする機会は減少しています。そこで、僕たちは屋台を組み立てたまま保存展示できる、まちにひらく住まいを提案しました。

昨今の日本では、まちの伝統が失われ元気を無くしている地域がたくさんあります。まちの伝統を活かし、伝統が地域の一部と化し、市民がまちに対する愛情を深めていければ、その問題も解決すると考え、作品づくりを進めました。今回の作品制作を通して桐生の魅力を改めて見出すことができ、伝統を紡ぐ大切さを実感しました。伝統は人々を繋げ、繋がりを濃くさせるものだと思います。このような提案が広まり、各地域がより彩りを放ち、生き生きとした世になることを願っています。

今回で桐生工業高校が先輩から繋ぎ、桐生新町重要伝統的建造物群保存地区の特色を題材に提案してきた作品は10作品目となりました。今後は、今までの作品が少しずつ現実化されることを望みながら、桐生の活気、溢れるまちづくりに貢献していきたいと思います。

終わりに、建築甲子園を開催していただき誠にありがとうございました。堀啓二審査員長をはじめ、多くの方々に評価していただいたことを誇りに、今回、得たものを今後の人生の糧に励んで参ります。本当にありがとうございました。

桐生工業高等学校 建設科チーム一同
（牛久保心星・清水拓海・清水璃奈・山口眞史）